The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エレファントマンを表象＝代弁した知識人 ： ジョゼフ・ケアリー・メリック(1862-1890) は語ったか
Author(s)	山田, 雄三
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2001, 2000, p. 35-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77295
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エレファントマンを表象＝代弁した知識人

——ジョゼフ・ケアリー・メリック（1862-1890）は語ったか——

山　田　雄　三

1．エレファントマンの物語か，メリックの表象＝代弁か

これはあまり知られていないことだが，エレファントマンと呼ばれた青年がフリークショーに出始めたのは，レスターのショー興行師サム・トーに宛てた職探しの手紙がきっかけであった。トーは手紙に答えて，その青年の住む救貧院にわざわざ足を運び，出し物としての価値を見積もったのだった。1884 年の秋，その青年がどのような気持ちで救貧院を出て，自活を始めようとしたのか，その感情はもはや誰も推し量ることはできない。（当時の救貧院の劣悪な環境から一刻も早く逃れたかったという言説も，伝記作者たちが頭で考えた感情の押し付けである）。忘れてはいけないことは，その青年がショーの出し物になるまでに，彼の意志もはたらいていたという事実である。レスターやノッティンガムなどのショー劇場で収益を得た青年は，同年 11 月にはより高い集客力が期待できるロンドンに赴く。エレファントマンを出し物とするフリークショーはロンドンのホワイトチャペル・ロード 123 番地で，入場料 2 ペンスで始められることになる。その興行に際して，『ジョゼフ・ケアリー・メリックの冒険－自然が造りだした奇形児，半人半象』と題された客寄せのパンフレットが発行されている。一人称で語られるメリックの物語は，長年，興行師トム・ノーマンが商売上の意匠も交えて代筆した似非自叙伝と考えられてきた。少し長くなるが，その自叙伝の冒頭部分を紹介しておきたい。

> 私は 1860 年［1862 年の間違い］の 8 月 5 日に生まれた。場所は，レスター州ウォーフストリートのリー通りである。母が一頭の象に極度に怯えた経験がきっかけとなって，私がお見せしている身体の変形は生じた。サーカスの動物たちが通りをパレードしているちょうどその時，母は同じ通りを歩いていた。彼女は不運にも，パレードを見ようと押し寄せてきた人々の渦の中で将棋倒しを受け，一頭の象の足元に突き倒されてしまった。その体験が彼女に極度のショックを与えた。母の妊娠中に起きたこの事故が私の変形の原因となった。私の頭回りを測ると 36 インチになる。後頭部には朝食に使うコーヒーカップほどの大きさがある肉の塊りがある。前頭部は比喩を使って言うと，肉が寄せ集まってまるで丘と谷のようだ。顔は再現しようにも描写する言葉も見つからない。

右手は象の前足と変わらないほど大きく，形もそれに似ていて，手首回りで 12 インチ，一本の指回りで 5 インチもある。左手左腕の形は整っているが，10 歳の少女の手や腕と変わらないほど細く華奢である。厚く肥大した皮膚が私の足一面を覆っている。私の胴体は象の胴体とよく似ていて，色も象色をしている。実際，見てみないと誰も私のようなものが存在するとは信じないだろう。この変形は生まれたときはそれほど目立たなかったが，5 歳頃から進行し始めた。私は他の子供たちと同じように 11 歳か 12 歳頃まで学校に通った。しかし，その頃，人生で最大の不幸が私を襲った。母の死である。お母さん，安らかに。母はほんとうに優しい人だった。[1]

エレファントマンを宣伝する「自叙伝」は，確かに執拗なまでに，メリックの身体と象の形質との共通点を挙げている。彼の母親を襲った不幸な事故も取って付けたようで，興行師トム・ノーマンの創作と考えられがちである。（メリック本人からこの事故の話を聞いたとするいくつかの証言，1862 年 5 月にウムウェル一座のサーカスパレードの記録がメリックの生まれ故郷に残っていることなどから，それがまったくの虚構だとは言いきれない）。上の「自叙伝」には多くの偏向があるにしても，そこにメリックの声が記されている可能性を否定する根拠はどこにもない。それはメリックという青年についてのもっとも初期の情報であるにもかかわらず，ショー宣伝用のパンフレットであるという理由で，事実歪曲の元凶と見なされてきた。その一方で，メリックの主治医トリーヴィス卿が残した医学誌記事やエッセイは，信憑性のある「真実」の記録として，その後の伝記記述や映画制作の主な材源（ソース）となっている。その表象＝代弁（representation）が高く信頼される知識人は存在する。表象＝代弁する知識人の物語は，多くの物語を贋作として葬り去りながら，歴史を生き残っていく。私はこの論の最後で，贋作とされるメリックの「自叙伝」をもう一度，これまでとは別の眼差しで読み直してみたい。

誰もメリックがほんとうは誰なのか，何者なのか最終的なことは分からない。彼が語るための条件はなんら揃っていなかった。ヴィクトリア時代の監視システムの中で，彼のように身体が変形した人間は人の目にふれることさえ制限された。さらに，メリック自身も「自叙伝」に書かれている以上のことを話したがらなかった。トリーヴィス卿がそれを認めている。「彼の幼い時期のことについては，私はほとんど何も知ることはできなかった。彼は自分の過去について話すことを非常に嫌った」。[2] そして何よりも口唇の変形が，彼の発話を聞き取りにくいものにしていた。トリーヴィス卿はメリックを始めて診断した時のことを，こう思い出している。「さらに，彼の発話はほとんど聞き取れなかった。彼の口から突き出た巨大な骨組織の塊りは彼の発話を曖昧にし，単語の分節発話（articulation）を不可能にしていた」。[3] メリックの分節発話が不明瞭であるという事実は，主治医に通訳者

[1] "The Autobiography of Joseph Carey Merrick," from Appendix One in Michael Howell and Peter Ford, *The True History of the Elephant Man* (Harmondsworth: Penguin, 1980), p. 182-184.
[2] Sir Frederick Treves, *The Elephant Man & Other Reminiscences* (London: Cassell & Company, 1923), p. 24.
[3] Treves, p. 16.

＝代弁者の資格を与えることになった。「彼ら［見舞いに来た人たち］のうちみんながみんな彼の発音を聞き取れるわけではなかったので，時として私が通訳者の役目を務めなければならない事態が生じた」。[4] そして，メリック自身が語らなかったという事実は，彼が窒息死する 1890 年から今日まで，医師，文学者，伝記作家，童話作家，人権運動家，劇作家，映画監督，劇評家，ミュージシャンなど多くの語る位置にある人々に，表象＝代弁の機会を与えてきたのだ。

この論のねらいは，ジョゼフ・ケアリー・メリックに関する文献を整理し，その上でもう一つ新しい文献を付け加えることにはない。それを試みたのが，1992 年に出版された二人の英文学者（Peter W. Graham と Fritz H. Oehlschlaeger）による共著『エレファントマンを分節＝接合（articulate）しながら』である。[5] 正直なところ，ここでの論稿は多くの情報を彼らの浩瀚な研究に負っている。しかしながら，私は彼らが研究の意義を次のように説明するとき，彼らの立つスタンスにいくらかの不満を感じざるをえない。「提案したいことはメリックの生涯についての記述を整理し，それについて考えてみることで彼を〈つなぎ合わせ／思い出す（re-member)〉ことである。（中略）メリックについて最終的な結語を述べたくはない。私たちはメリックを通して自分自身について語る方法を見いだした解釈者だと自認しているのだから」。[6] 彼らが語っている場所は，語るものを透明な存在に変え，なおかつ，自由な解釈者として語りの力を揮うことを可能にしている。メリックについて最終的な結語を述べないこと，そしてメリックの物語を結末のない永久普遍の物語として再提出することで，彼らはメリックを神話化しようとする。こうした試みは，エレファントマン研究という新しい領土を獲得しようと企てるも同然である。この試みでもっとも危険な点は，メリックに関する問題を，他の問題と安易に分節＝接合する解釈者たち，ひいては記号が記号を生産する議論を大量生産することである。（実際に彼らはメリックの変形した顔とミュージシャン，マイケル・ジャクソンの整形手術を施した顔とを同列に並べて議論している)。結果的にメリックや彼と同じ障害で現在を生きる人々の感情は汲み取られぬまま歴史に埋もれていく。

私のねらいは，メリックを表象＝代弁した記述は単なる文献ではなく関係であることを，そして，表象＝代弁する知識人がけっして無色透明な存在ではないことを，いくつかの例を挙げながら提案することにある。つまり，表象＝代弁の方法，主体，媒体の問題は，時間とともに変化していく社会，制度，文化と呼応しながら変化していく代弁者と被代弁者との関係の問題であることを明らかにしたい。そして，1880 年代からのメリックをめぐる記述を表象＝代弁として読むことが，新しい視座を産み出し，メリックの障害と見なされてきた神経線維腫症やプロテウス症候群とともに生きる人々との新しい関係形成を考えてゆく手立てになればと考えている。

---

[4] Treves, p. 23.
[5] Peter W. Graham and Fritz H. Oehlschlaeger, *Articulating the Elephant Man: Joseph Merrick and His Interpreters* (Baltimore: John Hopkins U.P., 1992).
[6] Graham et al., p. 10.

2．表象＝代弁者フレデリック・トリーヴィスと感情構造

1884年11月，当時31歳の外科医フレデリック・トリーヴィスは，ホワイトチャペルのフリークショーに出演していたメリックを「発掘」する。彼の症状は図版とともに詳細に記録され，『英国医学ジャーナル』12月号に紹介される。エレファントマンの名前をヴィクトリア社会に広める嚆矢となるその記事は，次のように締めくくられている。「頭部の肥大した変形と体の広範囲の部分に乳頭腫瘍が見られることから，その患者は〈エレファントマン〉と呼ばれている」。[7] しかしながら，エレファントマンの存在がロンドンの巷間に知れわたるようになったのは，それから2年後の1886年秋に，トリーヴィスが勤務する王立ロンドン病院院長が『タイムズ紙』編集長に宛てた投稿記事がきっかけであった。1886年6月に，トリーヴィスは，興行収益で自活できなくなり浮浪者同然となっていたメリックの身元引受人になる。病院長カー・ゴムはメリックを病院でケアするのに必要な財源を，『タイムズ紙』の読者からの寄付に求めたのだった。この記事が功を奏して，250ポンド以上の寄付が寄せられ，上は英国王室にいたるまで幅広い中上流階級層に一種のエレファントマン・ブームが起こったことは，どの伝記にもふれられていることである。

1923年2月，自らの死の数ヵ月前にトリーヴィス卿は，過去の臨床経験を振り返って一冊のエッセイ集『エレファントマン，その他思い出すことなど』を著す。その巻頭エッセイ「エレファントマン」は，50頁ほど頁数を割いてメリックをその症状面，精神面，人間関係の面で多角的に表象＝代弁した最初のテキストである。近年でこそ，トリーヴィス卿の文学愛好的側面や創作癖が指摘され，その表象＝代弁の史実性は疑われてはいるが，長年，メリックに関してもっとも信頼できる一次資料であったのは事実である。信憑性の問題はさておき，このテキストを表象＝代弁として読む立場に立てば，トリーヴィス卿がメリックを見つめる眼差しの中に一人のヴィクトリア知識人の複雑な感情構造が示されているように思える。

エッセイの冒頭部分，トリーヴィス卿はフリークショーで初めてメリックを目の当たりにしたときの印象を述べるとともに，その身体各部位を表象，再現している。

> 彼について最も顕著な特徴は，肥大して哀れな状態にある頭であった。前頭部からはパン一斤ほどの巨大な骨組織の塊りが突き出ていた。他方，後頭部からはスポンジ状の，キノコのような皮膚の塊りが垂れ下がっている。その表面は薄茶色のカリフラワーに喩えることができる。頭頂部にはわずかばかりの細長い頭髪も見られる。額の骨組織は異常に発達しているため，片方の目の視界をさえぎっている。頭周りはおよそ人の腰周りほどもある。上顎部からはまた別の肉の塊りが突き出ている。それは，ピンク色した歯茎がはみ出したもので，結果，上唇はめくれあがり，口というよりも単によだれを垂らす穴と言ったほうがいい。（中略）背中がまたひどい。というのも，背

[7] *British Medical Journal* (Dec. 6, 1884), p. 1140.

中から大腿部の中ほどまで，前述の見にくいカリフラワーの皮膚に覆われた，巨大な袋状の肉の塊りがぶら下がっているからだ。右腕は肥大し，変形している。象皮病患者の足を想像させるが，カリフラワー状の皮膚塊を伴って異常発達している。右手は手というよりも魚かカメのヒレのようだ。手のひらと手の甲との区別はつかない。親指はちょっとした西洋大根の大きさもあり，他の指は太い，チューブ状の根のようであった。（中略）左腕はまったく対照的である。正常であるばかりか，きめ細かい美しい肌をした実に均整のとれた腕であり，左手は女性だったら誰もがうらやんだような美しい手であった。胸部からは，またぞっとするような肉の塊りが垂れ下がっている。それはまるで，大トカゲの首から垂れた粘液のようである。（中略）彼のほぼ全身を覆うキノコのような発達性の皮膚組織からは我慢できないほど吐き気を催させる臭いが立ち上っていた。[8]

興味深いのはトリーヴィス卿が身体表象に使う語彙である。彼が身体の各部位を見つめる眼差しは，後で取り上げるが，同時代の博物学者の眼差しと大同小異である。彼らの知的バックボーンにはダーウィンの進化論があることは明らかだ。その思考の枠組みの中で，変異をどのように説明するかは，彼らが一様に持っていた関心事であった。しかし今仮に，そのような思考の枠組みを取り外して，上の記述が再現している存在を想像してみたらどうなるだろうか。カリフラワーの皮膚，カメのひれ，大根の指，大トカゲの粘液，ご婦人がうらやむほどの美しい手，それらが一体となった有機的存在を想像することも，再現することも困難なように思われる。トリーヴィス卿にこうした身体表象を促すのは，有機的存在をひとたび忘却して，障害のある各部位を個別に観察する眼差しである。トリーヴィス卿は同じエッセイ集に収められた別のエッセイ「ある心臓疾患の症例」の中で，今となっては自分が診察したほとんどの患者たちの名前も，顔も年齢も，性別すらも思い出せないと告白している。そして，かつての診察開始の瞬間瞬間についてこう振り返っている。「診察室の灯りは〈その膝〉〈あの興味深い頭部〉〈原因の分からない細胞増殖〉に当てられた。ある時は，裸の見るも哀れな彎曲した背中と美しい亜麻色の巻き毛が目の前にあった。その婦人が振り返ったとしても，私はたぶんその顔が分からない。思い出すのは，彼女の背中と巻き毛ばかりだ。実際，そこ［診察室］は人々が集まる場所というよりは，患者の身体の各部位が思い出させる〈症例〉の蒐集所なのだ」。[9] 王立ロンドン病院はまさしく，異常な症例の記録とホルマリン漬けの標本が蒐集された知と権力の中枢であった。

このような状況があったからこそ，トリーヴィス卿がメリックを初めて診察したとき抱いた次のような感情は看過すべきではないだろう。

私はメリックが精神薄弱だと信じていた。おそらく彼の知性は私が想像するように白

[8] Treves, p. 12.
[9] Treves, p. 142.

紙であってほしいという願望が，わたしにそのような確信をもたせたのだった。[10]

メリックの知性が白紙であって欲しいと思うトリーヴィス卿の感情構造は複雑である。もちろん一方で，診察している対象が思考することをしない肥大した頭蓋骨や感じることのない乳頭腫瘍であれば，その対象を症例として，標本として観察しやすくなることもある。他方で，その対象の知性が白紙でないとするならば，その上に塗り込められた22年間の歴史があるはずで，その歴史を想像することは心的な負担になったであろう。トリーヴィス卿が，メリックには「振り返るべき過去がなかったし，希望をかけるべき未来もなかった」と断言めいて表象＝代弁するとき，それはメリック自身の感情というより書き手本人の感情をむしろ明らかにしている。[11]

トリーヴィス卿の当初の確信にもかかわらず，メリックの知性は白紙ではなかった。彼は11歳頃までは学校に通っていたのだから当然，基本的な読み書きはできた。発話も聞き取りにくくはあっても，文法はしっかりしていた。ところが，トリーヴィス卿のエッセイ「エレファントマン」には，まるでメリックが未成熟な子供であるかのように表象＝代弁されている箇所が多く見られる。

世間の基準から判断すると，彼はほんの子供だった。だが，成人男性並みの情熱を持った子供であった。彼は初等の存在で，あまりにも原始的すぎて，その23年という生涯を洞窟に閉じこもって生きてきたかのようであった。[12]

トリーヴィス卿の表象＝代弁には，メリックを各局部の症例の集合体として観察する眼差しと，彼を後見する庇護者の眼差しとが交錯している。トリーヴィス卿は，メリックの本名がジョゼフであるにもかかわらず，ジョンと呼び，ジョンと表象＝代弁しつづけた。その理由はいまだに謎である。王立ロンドン病院で始まったメリック第二の人生の名付け親になりたかったのか，二人だけに許されるニックネームであったのか，あるいはほんとうに本名はジョンだと思い込んでいたのか理由は分からない。はっきりしていることは，トリーヴィス卿は自らを庇護者として自己提示すると同時に，メリックをいたいけな子供として，社会の犠牲者として表象＝代弁する傾向があるということだ。彼のエッセイでは，メリックの両親は障害を抱えた子を救貧院に置き去りにした無責任者であり，興行師たちも身体の変形で金儲けをする「吸血鬼の興行師」である。[13] 著者がメリックの庇護者になるまで，その哀れな「子供」は「虚栄の市の無慈悲な路地裏で〈みんなの見せ物〉にされてきたのだった」。[14] そして何よりも注目すべき点は，メリックが自分の身体を見せ物にすることに主体的にかかわったことを，トリーヴィス卿はいっさい表象＝代弁しなかった点である。

---

[10] Treves, p. 16.
[11] Treves, p. 24.
[12] Treves, p. 24.
[13] Treves, p. 29.
[14] Treves, p. 48.

トリーヴィス卿がメリックを見つめる眼差しは両義的で，私たちの読みをも混乱させる。それはまるでだまし絵のアヒルとウサギのようで，乳頭腫瘍を見ているときには，いたいけな子供は見えなくなってしまう。メリックを見つめるトリーヴィスの自己分裂的な眼差しは，彼の感情構造の表れなのかもしれない。トリーヴィス卿によるメリックの表象＝代弁の曖昧さは，そのエッセイの結語にいたるまで続いている。

> 人類の標本としては，メリックは醜くぞっとするものだった。しかし，メリックの精神は，それが一個の生身の人間に宿っていると考えれば，滑らかな額と無傷の脚，ひるむことを知らぬ勇気を湛えた瞳をもつ高潔な英雄の性質を帯びていた。[15]

感情構造とはレイモンド・ウィリアムズが述べたように，「私的な感情か公的なものか，個人的な感情か社会全体の経験か，そうした区別をあらかじめつける前に，全体として総合的に理解される」性質のものである。[16] エレファントマン・ブームが起こった 1880 年代後半には，当時の人々が異質なものと接触した際に催す感情に，複雑な構造性が見て取れる。1888 年には，ロンドン中を震撼させた切り裂きジャック事件も起こっている。また，1886 年に刊行されたスティーヴンスンの『ジーキル博士とハイド氏』が競って読まれたのもこの時期であった。二重人格を扱ったこの読物の中では，登場人物たちは口を揃えて，異様な容貌をもつ小男ハイドへの憎悪を露わにするが，その感情を表明する医学博士ラニョンの手記は，当時の感情構造を知る上でとりわけ興味深い。

> 彼と初対面であるのは確かだった。先に述べたように，小柄な男であるが，私はその顔の異様な表情に驚かされた。また筋骨のたくましさを感じさせる一方，見たところひ弱な体格の所有者であることも，やはり驚異である。それに劣らず印象的なのは，彼がそばにいると奇妙にこちらが不安を覚え，落ち着きを失うことだった。これは悪寒の初期の症状に多少似ていて，脈搏のいちじるしい低下をともなった。そのときは，私の個人的偏見が原因だろうと思い，むしろ自分の症状の激しさに不審を感じただけだった。だが，今では，嫌悪の原因が人間性に深く根ざしており，単なる憎悪よりも高貴な感情に発していると，確信するようになっている。[17]

屈強さとひ弱さとがグロテスクに混じり合った異形の者を初めて目にした時，ラニョン博士が抱く感情は個人的偏見に根ざす憎悪であると同時に，個人を超越し，社会正義とも呼べそうな「高貴な感情」でもある。それでいて，彼はこのハイドとの対面によって，何かに感染したのではないかという不安に悪寒をも覚え，さらには自我のバランスまでも失いかける。このテキストは，異質なものとの接触がもたらす複雑な感情構造を言説化している。

---

[15] Treves, p. 48.
[16] Raymond Williams, *Writing in Society* (London: Verso, 1983), p. 264.
[17] R.L. スティーヴンスン『ジーキル博士とハイド氏』（*The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*, 1886）海保眞夫訳（岩波文庫，1994 年）p. 94.

物語テキストを離れても，同様の感情構造を捉えることができる。『緑の館』や『はるかな国遠い昔』などの執筆で有名なイギリスの博物学者 W. H. ハドソンも，当時の感情構造を考える上で興味深い知識人である。彼は初期の著作『ラ・プラタの博物学者』(出版は 1892 年）は，プランテーション化の進む南米の草原で絶滅しつつある動植物種を活字において後代に残そうとした博物誌である。共感のこもった彼の眼差しは，草原に棲むスカンクやハチドリからマルハナバチ，蚊にいたるまでさまざまな生物たちに向けられている。ところが，「再び見られぬもの」と付けられた最終章にいたって，読者は不思議な記述と出会うことになる。

> 彼は身長が 5 フィート 11 インチ――ガウチョとしては非常に長身である――ほどあり，姿勢のいい，くっきょうな男で，おそろしく肩幅が広く，そのために丸い顔が小さく見えた。腕は長く手は大きかった。円い扁平な顔と，あらく濃い黒髪と，赤黒い皮膚と，滑らかな無精の頬とは，彼が彼の中にスペイン人の血よりインディアンの血を多く持っていることを示すように思われた。また彼の円い黒い目の表情は，純粋のインディアンより肉食動物のそれに近かった。（中略）口はおどろくべき特徴を示していた。というのは，それは大きさが普通人の口の二倍もあって，上下の唇が同じ厚さを持っていたからだ。この口は，話したり笑うべきはずのときに笑わないで，動物がうなるときのように唇を反らした。そしてそのとき，全部の歯と歯茎の一部が露出した。歯は普通の人間の歯ではなかった。門歯犬歯臼歯がすべて上下まったく同形で，おのおのが光沢ある白色の三角形をなし，歯茎のところが太くなって他の葉と接し，先端はもっとも鋭利な短剣の切っ先のように鋭かった。それはフカかワニの歯のようだった。（中略）その唇が猛獣がうなるときのようにめくれあがることと，歯の危険な形状との間には，唇をそらしてうなるすべての動物において見られるような完全な対応があった。（中略）わたしはこれまでボルネオのダイアク族のような首狩り族になりたいという願望に悩まされたことは一度もない。しかしこのときだけは，いかなる法律も犯すことなく，またわたしが人からされたくないことを他人に行なうこともなしに，この男の首をその特殊な恐るべき歯ぐるみ手に入れることができたらなあと，ほんとうに願った。[18]

私が戸惑うのは，ハドソンがラ・プラタで最後に「発掘」したものが特殊な歯をもったガウチョであったということではない。その現地人がネアンデルタールかクロマニョンか何らかの原人の生き残りだとハドソンは確信したわけだが，それを証明するのにもっと徹底的にそのガウチョの歯を観察，分析したいという感情は理解できる。(実際にハドソンは，この調査結果をダーウィン進化論に異議を唱える「不和のリンゴ」にできればという願望を述べているのだから)。戸惑うのは，ハドソンが首狩り族になってその現地人の首を手に

[18] W.H. ハドソン『ラ・プラタの博物学者』（*The Naturalist in La Plata*, 1892）岩田良吉訳（岩波文庫，1975 年）p. 380-383.

入れたいと思う，その感情である。人からされたくないことを他人にしてはいけないというモラルを同時に発話しながら，首を狩りたいとほんとうに願う，その複雑な感情である。その感情の中では，対象に対する率直な研究欲と遠回しの恐怖感とが渦を巻いている。このような感情は，ラニョン博士がハイド氏に対して抱いた憎悪や不安とも無関係だとは思われない。ひいては，メリックの知性が白紙であって欲しいと言ったトリーヴィス卿の感情とおそらくは深い部分でつながっているように思われる。ただメリックとラ・プラタのガウチョとで違っている点は，メリックはその骨格も石膏も皮膚組織も何から何まで標本として王立ロンドン病院に収められたのに対して，そのガウチョは「再び見られぬもの」になったという偶然の結果だけである。

もう一度トリーヴィス卿のエッセイに戻って，彼の庇護者としての眼差しについて考えてみたい。トリーヴィス卿のエッセイもまた，著者とその同時代人の感情構造を知るヒントを多く与えてくれている。トリーヴィス卿がメリックの知性が白紙であって欲しいと願ったときの感情は，個人的なものでもあり，かつ社会全体として理解される感情でもあった。トリーヴィス卿はエッセイのいたるところで，「メリックはほんの子供のままであった」という表現を繰り返している。次の二つの記述を例に取って考えてみよう。

> 身体的な障害は重いものではあったが，彼は性的本能や思春期の感情は正常なままであった。[19]

> ここに一人の大人の頭脳と，思春期の青年の夢想と，子供じみた空想を抱いた人間がいた。[20]

メリックは晩年，あてがわれた病院の一室で，トリーヴィス卿の立会いのもと実に多くの女性と面会したという記録が残されている。これは，メリックに「人間らしさ」を教え込むトリーヴィスの教育の一環として計画的に行なわれた。トリーヴィスは「メリックに人間としての転身をもたらすには，男性より女性の方が重要だと私は実感した」と書いている。[21] 加えて，彼には当時の美人女優の写真や多くの恋愛小説が贈られた。私はこのトリーヴィス卿の判断の根拠がいまだにはっきりとは分からない。メリックに余生を「人間らしく」過ごさせてあげたいという善意が，なぜこのような形を取ったのだろうか。どういう根拠から，トリーヴィス卿はメリックを「人間らしく」する鍵は女性にあると考えたのだろうか。

この問いを解くヒントはひょっとすると，当時注目されつつあった優生学にあるのかもしれない。1883 年にダーウィンのいとこにあたるフランシス・ゴルトンが自著の中で優生学（eugenics）という言葉を始めて使って以来，医学界を中心に遺伝子や遺伝プロセスへの関心は高まりつつあった。イギリスでは小学生の遺伝子病を調査するために，1885 年には

---

[19] Treves, p. 40.
[20] Treves, p. 42.
[21] Treves, p. 30.

王立障害者学級委員会も設置されている。そんな背景の中，メリックの王立ロンドン病院での生活は始まる。トリーヴィス卿は，メリックの障害が何らかの遺伝子の異常によって引き起こされたと推定していた。上で引用したように，メリックは性欲や性的機能においてはなんの障害もなかった。加えて，恋愛にあこがれる多感な20代の青年であった。彼が生殖活動を行なえば，彼と同じ障害が複製されていくことへの恐怖感はメリックと接する人たちの間に共通感覚として培われていたかもしれない。生殖能力がある以上，メリックの知性は白紙か，子供程度であるほうが望ましかった。恋愛や性に関心を持つ20代の青年であることは，むしろ脅威に映ったであろう。トリーヴィス卿がメリックの性の問題に無関心であったとは考えられない。そう考えると，トリーヴィス卿がメリックと貴婦人たちとの面会をお膳立てした背後には，ここにも両義的な感情が渦巻いていたと言えはしないか。一方で，女性に接する機会を奪われてきたメリックへの憐れみから，彼と女性との「人間的な」関係を形成したいという善意があり，他方に種の遺伝を恐れる気持ちから，彼の女性への関心をコントロールしたいという意志がはたらく。面会に立ち会うトリーヴィス卿の眼差しも両義的に思える。メリックが紳士然として女性と接する姿を見守る庇護者の眼差しと彼の性および種とを監視する眼差しと二つの眼差しが，面会の一部始終を見つめていたのかもしれない。

ヴィクトリア時代の慈善を偽善として暴くのは簡単である。トリーヴィス卿が取り計らった面会もメリックの性の管理装置と見なして，それを似非慈善行為だと断罪することも可能であろう。しかしながら，今日の私たちはそこから学ぶべきことは他にある。少なからずエネルギーを消耗させる表象＝代弁行為とボランティア活動との背後にあって，このような行為をあえて行なわせる感情がどのようなものか見極める視座が必要であるということを。

3．メリックは語ったか

再度，強調しておきたいことは，表象と代弁とは（representation の語義が示しているように）どちらかに帰一化できないほど不透明に交じり合っているということである。1880年代以来のメリック表象の歴史に身をおけば，私はメリックを表象しているのであって，神経線維腫症やプロテウス症候群の患者の代弁とは無関係であるとは，もはや誰も言えないのだ。難病を抱える人々が自由に語れる社会，彼らとともに未来を形成しうる社会がより開かれた社会だと考えるのならば，現代の知識人には「書くこと」や「描くこと」を通して，彼らとの線形成（alignment）が求められている。2000 年の時点で，全米では神経線維腫症（1型と2型を含む）を抱える人々は10万人以上に及ぶ。日本でも3,000人に1人は，同じ障害を抱えていると言われている。プロテウス症候群についてはいまだ正確な実態は分からないが，私たちは少なくとも，その症候群を初めて紹介した症例報告（『英国医学ジャーナル』1986年9月号）に掲載された写真の子供たちが，今ではメリックと同じ

青年期を迎え，どこかで何かを感じながら生きていることは想像できる。そのような人々との線形成がほんとうに可能かどうかは，表象＝代弁する知識人たちが彼らを見つめる眼差しをどこまで変えられるかにかかっている。

表象＝代弁する側の眼差しを問題にするならば，民族誌学の領域でライティング・カルチャー派と呼ばれる人々の活動は無視できない。彼らの論集（1986）は，興味深い写真をカヴァーに挙げている。[22] そこには，西洋から来た民族誌家がメモを取り（文化を記述し）つづける姿を，文字を持たない現地の人々が，背後から肩越しに眺めている模様が映し出されている。その論集の編者ジェイムズ・クリフォードはその写真についてこう述べた。「もし民族誌家がネイティヴの肩越しに文化を読むとすれば，ネイティヴもまた，記述を行なっているその民族誌家の肩越しに読んでいるのだ。フィールドワークは，以前だったら文盲と分類されていた人々の反応によって，何を公表するかが制限されている」。表象＝代弁される人々も彼らの目で表象＝代弁者を見つめており，彼らの「文字」を使って表象＝代弁者を読んでいるという意識は，非常に重要なものである。メリックと彼と同じ障害を持つ人々の表象＝代弁についても同じことが言える。彼らとの線形成を可能とするのは，彼らを見る客観的眼差しではなく，彼らが主体的に語ってくる眼差しへの眼差しなのだ。

メリックの「自叙伝」に話を戻そう。メリックとは自分で語ることのできない「ほんの子供」である（あってほしい）という見方，その「自叙伝」が興行師によって書かされたとする（なんら根拠のない）偏見をいったん忘れ去ってみて，もう一度「自叙伝」を読み直してみたい。

> 私の頭回りを測ると 36 インチになる。後頭部には朝食に使うコーヒーカップほどの大きさがある肉の塊りがある。前頭部は比喩を使って言うと，肉が寄せ集まってまるで丘と谷のようだ。

これと，トリーヴィス卿の表象＝代弁とを比較してみたい。

> 後頭部からはスポンジ状の，キノコのような皮膚の塊りが垂れ下がっている。その表面は薄茶色のカリフラワーに喩えることができる。
>
> 右手は手というよりも魚かカメのヒレのようだ。手のひらと手の甲との区別はつかない。親指はちょっとした西洋大根の大きさもあり，他の指は太い，チューブ状の根のようであった。
>
> 胸部からは，またぞっとするような肉の塊りが垂れ下がっている。それはまるで，大トカゲの首から垂れた粘液のようである。

メリックは自らの身体を表象，再現するのに，トリーヴィス卿や他の表象＝代弁者が用いた語彙をいっさい使わなかった。彼が自分の身体に向ける眼差しは，レスターの平凡な家

---

[22] James Clifford and George E. Marcus, *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethonography* (Barkeley: U. of California Pr., 1986).

庭の朝食に使われるコーヒーカップや彼が日常目にしていたであろう丘や谷を見る眼差しとなんら変わらない。表象＝代弁行為が被代弁者から搾取するだけの破廉恥な行為にならないためにも，メリックが自らの身体を見つめるこうした眼差しの中に彼が語ろうとした感情の最初の言葉を読み取っていく必要があるのではなかろうか。